

日枝神社例大祭に寄せて

法政大学総長 田中優子

二〇一八年の日枝神社例大祭、まことにおめでとうございます。氏子である法政大学の代表として、今年もひとつご挨拶させていただきます。

山王祭には、法政大学女子ラクロス部のメンバーが、女神輿を出させていただいています。二〇一四年は、連合宮入がおこなわれた六月一四日当日、ラクロス部の女神輿が清水谷公園から山王様まで、三台の山車、九台の神輿の一つとして練り歩き、宮入を果たしました。ラクロス部からは四八名が参加しました。五二段の石段も、かついで上がりました。

二〇一六年の例大祭では、山王祭の前の六月一日から八日まで、九段三丁目町会が保有する山車人形（牛若丸）と獅子頭を、法政大学市ヶ谷キャンパス一口坂校舎一階の情報発信スペースに展示いたしました。そして、六月十一日、法政大学女子ラクロス部のメンバーが女神輿を奉納させていただきました。揃いの法被をまとい、清水谷公園から日枝神社までの約一、四 km を練り歩きました。「関係者の皆様の多大なるサポートとラクロス部の素晴らしいチームワークで最後まで元気よく担ぎ続け、宮入することができました」と法政大学ホームページのニュース記事で書いています。

迫真の写真には、「清水谷公園前で、お神輿を囲む女子ラクロス部総勢 43 人のメンバー」から始まって、「明るい声でお神輿を担ぐ姿に、沿道の観客の方も笑顔で応援してくださいました」「途中ではスクールホリデーを利用して来日しているシンガポールの高校生との交流も」というコメントもあり、いよいよ日枝神社へ向かう最後の石段「男坂」という最大の難所に至り、「力を合わせて一段一段上っていきます」「無事に男坂を登り切り、日枝神社に宮入することができました」「最後にお神輿を日枝神社に奉納しました」と、頑張りを見せた経過を、楽しく報告しています。

山王社のみなさまや地域の皆様のご協力のおかげで、学生たちは地域の歴史がもつ力、熱意、仲間や地域とともに生きることを、心から知ることからできたと思います。学生を受け容れて下さった皆様に、深く感謝いたします。

とりわけ、伝統にはなかった女性たちと女神輿の参加を積極的に認めて下さったことは、日枝神社がこれからの神社として持続発展していくために不可欠の決断だったと思います。法政大学は「ダイバーシティ宣言」をおこないダイバーシティ推進をおこなっ

ています。女性たちは学生時代のスポーツ、勉強はもちろん、社会に出てからも世界規模で活躍しています。教員も職員もさまざまな責任ある役職に就き活躍することが増えています。これからも法政大学と地域とが、女性の活躍を中心に発展していきますよう、協力関係を築いていきたいと思ひます。

日枝神社は、江戸時代の人々に「山王様」という名前で親しまれていました。日枝神社はそもそも仏教と神道が合体した「山王権現」でしたので、「山王様」なのです。江戸時代までの神社は国家のためのものではなく、その土地の自然と人々の安泰や平和を守る存在だったのです。江戸時代の地図には「日吉山王大権現社」と記され、まわりをぐるりと、たくさんの寺院が取り囲んでいます。しかし明治政府はそこから仏教を切り離し、国家神道に組み込んで「日枝神社」としました。江戸文化を大切に思ふ私の心の中では、今でも神田神社は明神様で、日枝神社は、自然を守り争いのない時代を願う山王様です。都市としての江戸は、寛永寺、増上寺、明神様、山王様によって東西南北をしっかりと守られていました。

山王権現の祭は、江戸三大祭の筆頭で日本三大祭のひとつです。江戸時代では将軍がご覧になる天下祭、御用祭でした。歌川広重の『名所江戸百景』「糺町一丁目山王祭ねり込」には、花笠をかぶったおおぜいの人々が巨大な作りものの山車を引いて、半蔵御門から江戸城に練り込もうとしている情景が描かれています。これらの行列には山車、曳物、練物、お囃子、踊りが出たようです。そのなかで注目すべきは、大きな象の作り物と朝鮮通信使の練物です。

象の作り物は、ベトナムから運ばれた象が、江戸城まで江戸の街道を歩いた記憶を祭に組み込んだものです。朝鮮通信使の練物は、江戸時代のあいだずっと続いた朝鮮王国（現在の北朝鮮、韓国）からの使節を取り入れたもので、友好関係の記憶をとどめるために、祭の中に取り入れられました。江戸の祭は当時の国際的な交流の一端が見える機会でもありました。

二〇一七年、法政大学の研究計画「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」が文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に採択され「江戸東京研究センター」ができました。江戸東京と日本の文化を国際的に発信していきます。江戸東京の神社とは、研究の上でも絆を深めたいと思ひます。

今年も、例大祭の成功を心より祈っております。